

刀剣や武具

日本の弓矢

一般的な認識と異なり、日本の歴史において何世紀にも渡って戦士の典型的なイメージは馬に乗った射手であり、剣士ではなかった。源平合戦（1180-1185）の記録によると、大規模な合戦は、飛びながら笛の音を発する“鐃矢”の応酬の連続によって始まる。一度戦が始まると、馬に乗った戦士たちが自分とぴったりランクが合う敵を探し、再度弓矢の応酬を行い、1対1の戦いを開始する。

日本の伝統的な長弓は約220cmで、持ち手は弓のカーブを3分割した時の1/3にあたる位置にある。12世紀まで、弓はすべて里桜、もしくは桑から作られていた。何世紀にも渡り、少しずつ漆を塗られた竹の層が補強として外側に張られるようになり、そして戦国時代（1467-1568）までに一部の弓の中心部分は竹を幾重にも重ねたもので作られるようになっていた。

アーチェリーは現代の戦闘で見られることはほとんどないが、その伝統は、弓道（立ったまま、もしくは座って行うアーチェリー）や12世紀以来ずっと行われてきた流鏑馬や笠懸などのあらゆる日本古来の武術という形で今も生きている。

日本の刀剣

16世紀から17世紀にかけて、槍、弓、火縄銃が戦場で最も大きな役割を果たしたが、平和な時代にも、刀剣は権力と社会的地位の重要な象徴として等しく重要であった。日本刀の製造には長い時間が必要で、精巧な付属品と装飾の仕事は、所有者の地位を高めるのに役立った。17世紀初頭、日本は単一の政府の下に統一され、2世紀半の間、大規模な軍事紛争は少なかった。刀を身につける特権は、武士階級だけに許された。剣は、称号、土地と同じように、褒賞の際に武士に褒美として与えられることが多かった。特に江戸時代（1603-1867）には、武士の刀は名誉と生計を表すものであった。

井伊家のコレクション

井伊家は関ヶ原の戦い（1600）と大阪の陣（1614-1615）に参加した。博物館の武器コレクションにはこれらの戦争で使用された武器が含まれている。彦根城博物館のコレクションは16-18世紀の弓、さまざまな種類の矢筒（箆、矢筒、鞆）、腕甲（弓

籠手)を有している。このコレクションの中には、彦根藩の初代大名であり、関ヶ原の戦いの際に徳川方について戦った赤備えとして有名な部隊の指揮官でもある井伊直政(1561-1602)が所有していたと考えられている弓矢もある。井伊家は江戸時代の終わりまでに600振り以上の刀剣を有していたが、1923年の関東大震災で収蔵品の多くが焼失し、今日ではわずか60振りの刀剣しか残っていない。